「One for all, All for one」

巻・頭・言

令和４年度特許庁技術懇話会 副代表委員／編集委員長　　貞光 大樹

令和４年度の特技懇副代表委員／編集委員長を務めております、貞光大樹と申します。今年度の特技懇誌は、私のほか、４名の編集委員と、１名の広報幹事からなる６名の体制で進めて参ります。これから１年間、どうぞよろしくお願いいたします。

表題は、私の座右の銘の一つです。ラグビー精神を表す言葉や、アレクサンドル・デュマの小説「三銃士」に出てくる有名な台詞として、皆様も一度は聞いたことがある言葉ではないでしょうか。

日本語では、「一人は皆のために、皆は一人のために」と訳されることが多いですが、「一人は皆のために、皆は一つの目的のために」と訳されることもあるようです。初めて聞いたときは前者の言葉でしたが、後日後者の訳もあることを知り、状況に応じて都合良く理解しているところでありますが、最近では、上記両方の理解に加えて、自分一人で行っていることであっても、多くの人の協力に支えられていることを忘れずに、常に感謝の気持ちを持つ、ということも心掛けています。

さて、入庁当時から感じているところではありますが、特許庁は非常に働きやすい職場です。改めて「何故働きやすいのだろうか。」と考えたときに、特許庁自体が、まさに、表題に挙げた「One for all, All for one」の精神があり、自分の感性に合致しているからではないか、と気付きました（個人の勝手な思い込みです。）。普段の審査業務においても、多くの方は、自分のために仕事をしていると意識しているのではなく、発明者・出願人・第三者を含めた皆のために仕事をしていると意識しているのではないでしょうか。また、指導審査官による審査官補の育成、品質管理官による品質監査、同僚審査官との協議等は、皆が一人のため、そして、皆が一つの目的のために行っていることといえるのではないでしょうか。

新型コロナウイルスの感染拡大により、従来のワークスタイルが大きく変化したこともあります。テレワークやオンライン会議が浸透し、ランチ会や飲み会が減少し、一昔前と比べますと、対面でのコミュニケーションの機会が減ってしまっているかもしれません。しかしながら、新たなワークスタイルにチャレンジするべく、組織一丸となって、テレワークでの審査環境の整備や知見の共有が積極的に図られたことで、業務の効率化や多様な働き方の促進といった多くのメリットが生まれたことも、皆で一つの目的のために取り組んだ結果といえるでしょう。

前置きが長くなりましたが、特技懇誌も、「One for all, All for one」の精神でできております（個人の勝手な思い込みです。）。

本号の執筆者の皆様には、「One for all」の精神で、ご知見を紹介いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

読者の皆様におかれましても、「One for all」の精神で、ご自身の知見等をご紹介いただける方がいらっしゃいましたら、本紙巻末に記載しております連絡先までご連絡いただくか、直接編集委員までお声がけください。記事の感想や、「こんな記事が読みたい。」というようなご要望がございましたら、アンケートにご協力いただけますと幸いです。

編集委員一同、皆様のご協力のもと、より良い特技懇誌をお届けできればと考えております。